

## 〔博士論文概要〕

# シュタイナー学校における造形教育の特質とその展開

平成30年度

吉田 奈穂子

筑波大学大学院人間総合科学研究科

芸術専攻

本研究の課題は、シュタイナー学校（Steiner Schulen）において取り組まれている造形教育について検討することである。特に、ドイツのみならずアジア地域におけるシュタイナー学校の実践を通して、西洋文化の中で生まれた教育が東洋でどのように変容し、展開されているのかについて、造形教育の側面から考察する。

シュタイナー学校は造形教育を含む芸術教育を重視している。6歳から18歳までの一貫教育の中で芸術教育を行うこの学校の実践では、専門科目として造形教育に取り組むだけでなく、学級担任教師が指導する国語科や算数科、社会科、理科の教科の学習にも造形教育が浸透している。また、シュタイナー学校においては、理念的背景として創始者ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861~1925）の独特な思想である人智学（Anthroposophie）を基盤とし、知情意の調和的な人間発達が目指されている。

このような学校の特徴を踏まえ、本研究の目的は、人智学の目指す教育理念が現代のヴァルドルフ教育（Waldorfpädagogik）とどのような関わりをもちうるかについて、人格形成を主眼とする日本の学校とその他の地域の学校における造形教育の実践を比較考察することによって、理念と実践との間を造形活動の視点から結び結びながら、シュタイナー学校における造形教育の特質を解明することに置く。

## 第1章 シュタイナー学校における造形教育の理論的な基盤

第1節では、シュタイナーの人間の本性に関係する彼の理論や思想を考察した。シュタイナーによれば、人間は成長し続け、輪廻転生の中で生きている存在であることを前提にして、人間の存在は「身体（Leib）」「心性（Seele）」「精神（Geist）」から成るといふ。この理念に基づいて、シュタイナー学校において実践されるヴァルドルフ教育は、人間を全体的に育てる視点をもちながらも、限られた学校教育では「心性」の働きである「意志（Wollen）」「感情（Fühlen）」「思考（Denken）」の順に重きを置いて育てることで調和的な人間を育てることを目指している。

第2節では、シュタイナーの芸術と美に関する理論と思想を明らかにした。シュタイナーは、彼独自の認知論を根拠に人間が感覚的世界から精神的世界の獲得に至るために芸術教育を重視する。

第3節では、シュタイナー学校共通の教育課程と造形教育の内容を検討した。世界のシ

シュタイナー学校をまとめる自由ヴァルドルフ学校連盟が公開する教育課程から、この学校の造形教育共通の事項を取り上げた。その教育課程や授業科目の検討した結果、シュタイナー学校における造形的な活動は、国語、算数、社会、理科の学習を行うエポック授業（Epochenunterricht）において各学習内容に関連して取り込まれるものと、4年生までの学年を中心として図や模様を描くシュタイナー学校独自のフォルメン描画（Formenzeichnen）、そして9年生以上の高学年の特別なエポック授業として、美術史において行われている。一方、専門教師が教える専門教科授業（Fachunterricht）においては、絵画・素描と彫刻、塑像で造形的な活動が行われる。つまり、エポック授業と専門教科授業によって、教育課程全体に造形的な活動が浸透しているのである。

## 第2章 ドイツのシュタイナー学校における造形教育の諸相

第1節ではドイツ国内におけるシュタイナー学校の設立と展開に関する歴史的背景について考察し、実地調査を行う学校を選定するための視座を得た。

第2節以降では、筆者が教員養成課程を修了したニュルンベルク・シュタイナー学校（Rudolf-Steiner-Schule Nürnberg）の実践を取り上げ、この学校における造形教育の特徴を明らかにした。具体的に言うと、エポック授業における造形的な活動は、学級担任によって多様な材料や素材が扱われる。主に蜜蝋クレヨンや色鉛筆などによる描画活動に取り組みられているが、それは子供の特徴と発達段階に関連した造形的な活動であった。たとえば、4年生までは話を聞いて想像する活動が重視され、絵から文字という順で学ばれる。5年生以上の学年では、徐々に文字情報を補う意味での絵や図がノートに描かれるようになり、表象をイメージする内面の造形的な活動や手を使った表現活動の機会はそれ以下の学年に比べると減少していた。

さらに、エポック授業における造形的な活動を考察すると、内面における造形活動による想像力、教師の模倣や繰り返しによる子供の思考（Denken）、色彩豊かに図視化された表現による子供の感情（Fühlen）、教科連携による学習への意志（Wollen）に働きかける4つの視点が得られた。一方、専門教科授業に関しては、1年生からの絵画・素描と、5年生からの手作業科（Handwerk）で木工、粘土、金工、石彫に取り組みれていた。そこから、専門教科授業における造形的な活動は、エポック授業で学んだ記憶の想起、平面から立体への認知の広がりによる思考、対立概念とその調和を追求することによる感情、用途のあるものや自己表現による意志に働きかけるという4つの視点を得られた。

## 第3章 東アジアのシュタイナー学校における造形教育の諸相

日本の実践を見る前に西洋と東洋という文化の異なる東アジアではどのようにシュタイナー学校が展開しているのかについて、中国の成都ヴァルドルフ学校（Waldorf school Chengdu）、台湾の慈心ヴァルドルフ学校（CiXin Waldorf School）、韓国のプルンスプ・ヴァルドルフ学校（Purunsup Waldorf School）と童林自由学校（Dongrim freeschool）3か

国の造形教育の実践を通して明らかにし、第 2 章で得られた視点に則して考察した。これらの学校は私立、公立の実験学校と無認可のフリースクールとしてさまざまに活動しており、各国の文化や伝統芸能、伝統芸術は積極的に授業に取り入れられている。中国の水墨画、台湾の先住民に関する学習や伝統的な指人形、韓国の民画など各国独自の授業が見られた。一方で、教育課程の基盤は欧米のシュタイナー学校のものであり、歴史教育では欧州の学校と同様にギリシャやローマなどヨーロッパ、さらにアジアや自国の歴史が学ばれ、学習内容が多くなる傾向にある。

#### 第 4 章 日本のシュタイナー学校における造形教育の諸相

現時点で日本に存在する 7 校のシュタイナー学校のうち、学校法人シュタイナー学園、東京賢治シュタイナー学校、京田辺シュタイナー学校の 3 校の現地調査と教員への聞き取りをもとに、日本におけるシュタイナー学校の造形教育の実際を調査した。各学年の子供の発達と造形教育の関わりを解明に重きを置き、造形教育の内容を検討した。1 年から 4 年生までの子供はエポック授業やにじみ絵を通して色彩豊かな造形に親しみ、教師の絵を模倣しながら豊かな表象を得る。5 年生以上の子供は知力の発達にともなって、平面から半立体や立体の造形や、遠近法や明暗素描を学ぶ。7 年生の子供は、自分の内面に閉じこもる傾向が出てくることから、授業で相対する概念を扱いながら、そのバランスを追求するような制作活動に取り組む。8 年生の子供は因果関係に対する興味が湧いてくるために仕掛けのある玩具づくり、9 年生の子供は「判断」に必要な思考力を育てるため造形活動でも理想の形を考えて表現する。9 年生以上は自己表現活動を始め、社会における自分の役割や価値を見出していく。

日本独自の題材としては、茶道や書道に関連した陶芸での茶器制作、結びの文様や水引、家紋を扱ったフォルメン描画など、学校の近隣で活動している芸術家との協力や地域性を生かした授業が行われている。一方で、教師への聞き取りからは、日本の文化だけでなく、日本人の気質を考慮した題材の模索も行われている。

#### 終章 シュタイナー学校における造形教育の特質とその展開

シュタイナー学校では、子どもの発達段階に応じて「意志」「感情」「思考」を育てるという思想のもとに教育が行われているが、本研究においては、実際の授業にそれらがどのように反映されているかについて、造形教育の観点から、カリキュラム、題材、教室環境、児童生徒のノートや作品、担当教員への聞き取りなどの現地調査、ならびに各国の学校間の比較を通して具体的に明らかにした。シュタイナー学校におけるヴァルドルフ教育は、エポック授業において様々な教育活動の基盤として造形を活かしながら、学年の進行に伴って専門教科としての造形活動へと重点を移していく中に、子どもの「意志」「感情」「思考」の発達段階を有機的に組み合わせていくという、カリキュラム全体を見通した教師と子どもたちの相互作用を通して実現されていくものであり、発祥地のドイツのみならず、アジア諸国、

日本においても一貫して追求されている教育姿勢であることが大きな特色であった。

具体的に言えば、頭の中でイメージしてからの造形や、既習内容を活用した表現活動は、学習活動を子供の実生活や世界と結びつけることができる。造形活動の頭、胴体、肢体を働かせる身体性は、造形や学習に対する意欲や「意志」を高める。色や形、テクスチャ（素材の質感）の造形要素は、美的感覚を子供に与え「感情」に働きかける。そして遠近法など表現技法の理解や立体造形は、ものごとを主観・客観的に、さまざまな視点から見る活動である。それにより、多角的なものの見方を子供に獲得させ、柔軟な「思考」を育てることができる。つまり、造形的な活動のもっている身体性、造形要素、ものの見方が、「意志」「感情」「思考」の調和的な発達にかかわっている。

シュタイナー学校では、彼の思想である人智学に基づく共通の理論のもと教育活動が行われているが、ドイツという西洋文化の中で生まれたヴァルドルフ教育は、現在東洋のアジアの国々で現在広く展開している。本研究では、東アジアのシュタイナー学校のいくつかの教育実践から、地域性や文化や伝統などを学習に取り入れたヴァルドルフ教育の独自の展開を見た。その反面、欧米のシュタイナー学校で取り組まれている教育課程を基盤として、自国に関する学習内容を加えて行うことで、授業で取りあげる学習内容が多くなっていた。

最後に、一般的な造形教育では、「想像力」「感性」「情操」「思考力」などの概念によってその価値や意味が重視されているが、ヴァルドルフ教育は、長年にわたり独特の理論の下、こうした力を全体的に育てながら、調和的な人間の育成という課題に答えてきた。時代の要求に合わせて変化していく現代の日本の学校教育に対して、シュタイナーの思想を基礎としたヴァルドルフ教育が、柔軟に新しい教育や時代に即した対応をすることは難しいであろう。しかし、シュタイナー学校の実践が約 100 年にわたり、調和的な人間形成という教育の本質を見失わない教育を展開し続けてきたことは特筆すべき点であり、将来的には日本の公教育とシュタイナー学校が影響し合うことによって、互いの造形教育の課題に対する新しい展開の可能性がありうると、筆者は考える。

#### 補章 日本における造形教育の実践

日本の公立学校においてシュタイナー学校で行われている造形的な活動の実践の提案を行った。学習指導要領に準拠した教科書題材の制作過程において、シュタイナー学校で行われている造形的な活動を取り入れることによって、教科の連携を図りながら造形活動を実践することができた。その結果、日本の学校教育における教科連携のあり方と、子供の発達に合わせた図画工作科の題材設定に関する実践の提案となった。シュタイナー学校の造形教育には、1つの題材の中で全員の児童生徒に1つの目標を与えるのではなく、子供の個々の発達と成長に合わせて、「意志」「感情」「思考」に調和的・統合的に働きかける実践の可能性を垣間見ることができた。